

# 長承本『蒙求』平安中期点の声調体系

佐々木 勇

キーワード：九声体系・八声体系・平声軽の軽・平声軽の重・アクセント

## 要 旨

長承三年識語本『蒙求』の漢字にほどこされている平安中期朱声点が、「九声体系」から変化した「八声体系」によって加點されていることをあきらかにする。本資料の声調体系の源流である九声体系とは、平声重・平声軽の軽・平声軽の重・上声重・上声軽・去声軽・去声重・入声軽・入声重の九種の声調を区別するものであり、そのうち、去声における軽重の区別を失ったものが、長承本『蒙求』平安中期点の八声体系である。日本漢音の中心的な声調体系である「六声体系」のほかに、平安時代初中期には、さらに多くの声調を区別する体系が存在していたことは先学によって指摘されていた。本資料は、実際の加點に基づいて、当時の漢音声調の一実態を知ることができるとして貴重である。

## はじめに

日本漢字音のうち、いわゆる漢音は、平安・鎌倉時代の現存資料に例外なく声点加點されていることから、伝来以来、声調漢字一字ごとのアクセントの認識をともなうて学習され、唱えられていたことが知られる。このような漢音の、早い時期の訓点資料として、長承本『蒙求』平安中期点がある。本稿は、先般、『長承本『蒙求』として全巻のカラー影印本（汲古書院、一九九〇年）が出版されたのを機会に、日本漢音の代表的資料の一つとされている『蒙求』の、平安中期点の声調体系について検討を加えようとするものである。

### 一、長承本『蒙求』の訓点

長承三年（一一三四）の奥書を持ついわゆる長承本『蒙求』は、現存最古の『蒙求』の写本であり、その本文に加點された訓点も、諸本中最も古いものである。本資料は、築島裕「長承本蒙求字音点（一）（二）」<sup>注1</sup>「訓点語と訓点資料」第十輯、同第十一輯、同第十三輯）でその全容が紹介されて以来、日本漢音の重要な資料の一つとして利用されてきている。その訓点は、次の三種類とされている。

①平安中期（天曆八九四七〜九五七年）朱点  
 ②長承三年（一一三四）墨点  
 ③院政末期〜鎌倉初期墨点  
 したがって、長承本『蒙求』は、本文の漢字に朱声点が丹念に加点され、朱の類音字注と仮名音注とが所々に存する状態で、天曆ころから長承三年（一一三四）まで伝わっていたものである。

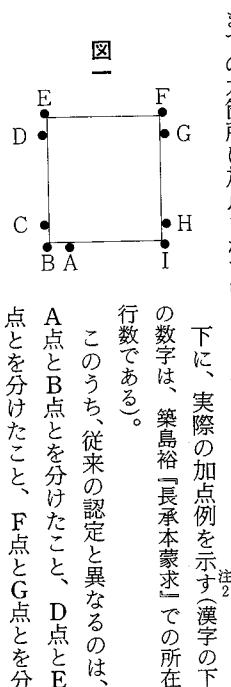
二、長承本『蒙求』平安中期点の声点

1 従来の研究

長承本『蒙求』平安中期点の声点は、従来の研究（注1参照）では、平声・入声に軽重を区別する、平声・平声軽・上声・去声・入声軽・入声の六箇所に加点される六声体系であるとされている。

2 影印本で確認せられる声点の位置

ところが、影印本を細かに見ると、図一のように、声点はA〜Iまでの九箇所に加点されていることがわかる。



下に、実際の加点例を示す（漢字の下  
 の数字は、築島裕『長承本蒙求』での所在  
 行数である）。  
 このうち、従来の認定と異なるのは、  
 A点とB点とを分けたこと、D点とE  
 点とを分けたこと、F点とG点とを分

けたことである。

A点は、漢字の左下の内側に加点される。最初の「無」は、烈火  
 の二つ目の点の内側に平安中期点の加点され、その左側に長承三年

D点とE点との差は微妙であるが、最初の「下」に対する声点は、  
 明らかに六声体系の上声の位置よりは下に加点されている。そのため、  
 左上の隅に加点されているものと、その下に加点されているものとを、  
 これも肉眼で判断して、区別した。

F点とG点との差はさらに微妙であるが、声点加点部分の字形が  
 似ているものを並べてみると差がみられるため、区別してみた。

三、『蒙求』平安中期点の声調体系

1 『廣韻』声調・声母の清濁との対応関係

ここで、これまで六箇所とされていた声点の加点位置を九箇所と  
 認定したものを、『廣韻』の四声および頭子音の清濁と対比させてみ  
 る。本資料の声調体系が、従来の研究の通り六声体系であれば、A  
 ・Iの各点が『廣韻』とそれぞれの対応を示すことはなく、六種類  
 にまとまってしまはずである。

『廣韻』との対比の結果は、「表1」の通りである。

「表1」から以下のこと知られる。

- A点は、『廣韻』平声次濁・全濁字に96・2%が加点されている。
- とりわけ平声次濁字は全体の71・3%を占めている。
- B点も平声次濁・全濁字に90・7%が加点される。ただし、A点  
 と異なり、平声全濁字に73・8%が加点されている。
- C点は、平声全濁字・次清字に92・0%が加点されている。全清  
 字と次清字との割合の差は、全清字と次清字のそれぞれの総数の差  
 によるものと思われる。
- D点は、上声全濁字に92・3%が加点されている。
- E点は、上声字に95・1%が加点されている。ただし、上声全濁

点の加点されている例である。二番目に挙げた「児」の例も同様で  
 ある。また、三番目の「鑑」は、平安中期点によってA点とB点と  
 の両点が加点されており、この両点の位置の差に、何らかの意味が  
 存したと見られる例である。

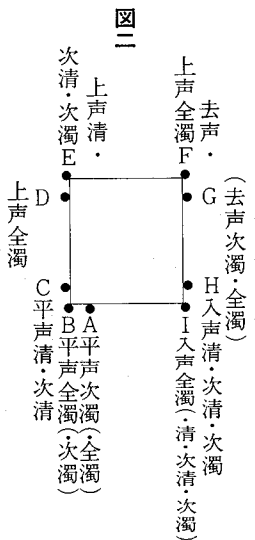
A	無	70	児	70	鑑	70	遺	105	凌	80
B	懸	17	鳥	62	鏡	32	送	62	陳	27
C	豊	16	宗	20	曹	22	高	22	公	26
D	下	90	造	56	松	48	秦	79	壽	38
E	不	24	迎	41	楷	32	武	86	董	65
F	蓋	7	泰	147	應	83	慶	89	祭	75
G	義	80	議	38	劇	33	病	97	降	22
H	腕	23	掌	36	蠟	42	木	102	落	115
I	絶	94	亦	112	食	81	慄	37	石	86

字への加点は5・8%と少ない。上声次清字への加点の割合も多い  
 とはいえないが、これは所属字数の少なさによるものと判断される。  
 F点は、上声全濁字と去声字に96・5%が加点されている。  
 G点は、全体数が少なく判然としない。あえていえば、去声の次  
 濁・全濁字に比較的例が集まっている。

H点は、入声全清・次清・次濁字に92・7%が加点されている。  
 全清・次清・次濁字間の割合の差は、それぞれの所属字数の反映と  
 考えられる。

I点は、入声全濁字に64・6%が加点されているが、入声全清字・  
 次清字・次濁字への加点数も少ない。

右を声点図中に書き込んでみると、図二のようなになる。



2 『蒙求』平安中期点の調類

A点・I点は、例外は少ないものの、すべて『廣韻』の声調・  
 声母とそれぞれ独自の対応を示している。よって、初めに区別した  
 九箇所の声点のうち、六声体系からはずれるA点・D点・G点を、  
 単なる加点の際のずれとしてしまうことには躊躇されるのである。

A点とB点の次濁字・全濁字への偏りの差は、有意差と考えられ  
 る。また、例数は少ないがD点が上声全濁字に集中するのも偶然と

承和之末正法師來。初習洛陽、中聽大原、終學長安、聲勢太奇。四声之中各有輕重。平有輕重、輕亦輕重、輕之重者金怒聲也。上有輕重、輕似相合、金声平輕上輕、始平終上呼之、重似金声上重不突呼之。去有輕重、重長輕短。入有輕重、重低輕昂。元慶之初聰法師來。(略)四声皆有輕重・著力。平入輕重同正和上。(略)去之輕重似自上重(以下略)

〔悉曇藏〕第五。『大正新脩大藏經』による。句読点は佐々木經による。句読点は佐々木經による。右の安然『悉曇藏』の記述によつて、九世紀の半ばにそれまでの声調とは違つた耳新しい声調が、「惟正」「智聰」によつてもたらされたことが知られる。その声調体系は、四声それぞれに軽重を区別し、なおかつ平声輕にのみ更に軽重を区別するものである〔平有輕重、輕亦輕重〕。その「平声輕の重」は、金礼信の伝えていた音の「怒声」〔次濁音、だというのである。すなわち、「惟正」「智聰」の伝えた声調体系は、平声重・平声輕の輕・平

は思われぬ。ただし、G点は全体の加点数が少なく、加点位も去声の大部分に対応しているF点との区別が容易でないため、本資料では、体系的にはF点とともに一類を成すと見るべきであろう。

すなわち、本資料の声調の種類は、A・B・C・D・E・F(G)・H・I点で示されている八種であると考へられ、それぞれが異なる声調を示している可能性が出てきたのである。

しかし、右のような、平声に三種を区別する声調を持つ加點資料は、いまだ報告されていない。そこで次に、このような声調体系が当時存したものかどうか、記録によつて探つてみたい。

3 『悉曇藏』の九声体系

平安時代の漢音声調について記したものとては、安然の『悉曇藏』(八八〇年成立)の記述が有名である(早くから各論に引かれるところであり、部分的に引用する)。

我日本国、元傳二音。表〔袁〕則(略)。金則(略)。

表1

廣韻 点	平 声				上 声			
	清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁
A点	5(5) <1.7%>	3(3) <1.0%>	45(72) <24.9%>	92(206) <71.3%>				1(1) <0.3%>
B点	13(14) <6.2%>	2(2) <0.9%>	102(166) <73.8%>	30(38) <16.9%>	2(2) <0.9%>		1(1) <0.4%>	
C点	188(383) <75.1%>	50(86) <16.9%>	24(28) <5.5%>	4(4) <0.8%>	2(2) <0.4%>		1(1) <0.2%>	
D点							25(36) <92.3%>	1(1) <2.6%>
E点	3(3) <0.8%>	3(3) <0.8%>	2(2) <0.6%>	3(3) <0.8%>	84(157) <43.3%>	30(49) <13.5%>	18(21) <5.8%>	54(118) <32.5%>
F点	4(4) <0.9%>	2(2) <0.4%>	4(4) <0.9%>	1(1) <0.2%>			31(49) <11.0%>	3(3) <0.7%>
G点							2(2) <13.3%>	
H点								
I点				1(1) <0.9%>				
計	213(409)	60(96)	177(272)	131(253)	88(161)	30(49)	78(110)	59(123)

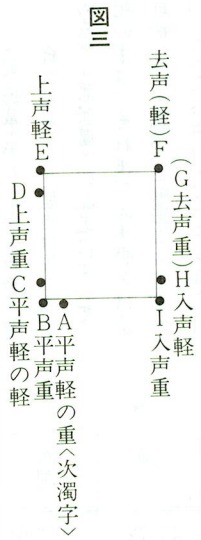
去 声				入 声				計
清	次清	濁	次濁	清	次清	濁	次濁	
2(2) <0.7%>								148(289) <100.0%>
		1(1) <0.4%>	1(1) <0.4%>					152(225) <100.0%>
3(6) <1.2%>								272(510) <100.0%>
		2(2) <5.1%>						28(39) <100.0%>
1(1) <0.3%>	3(3) <0.8%>	1(1) <0.3%>	2(2) <0.6%>					204(363) <100.0%>
112(177) <39.8%>	33(43) <9.7%>	49(75) <16.9%>	50(85) <19.1%>	1(1) <0.2%>			1(1) <0.2%>	291(445) <100.0%>
1(1) <6.7%>	1(1) <6.7%>	5(5) <33.3%>	5(6) <40.0%>					14(15) <100.0%>
				70(113) <48.3%>	31(45) <19.2%>	13(17) <7.3%>	43(59) <25.2%>	157(234) <100.0%>
				18(22) <19.5%>	5(5) <4.4%>	43(73) <64.6%>	10(12) <10.6%>	77(113) <100.0%>
119(187)	37(47)	58(84)	58(94)	89(136)	36(50)	56(90)	54(72)	1343(2233)

注) ①上段の先の数字は異なり字数、後の( )内の数字は例数を示す。下段< >内は、各点加點例の総数を100.0%とした場合のパーセンテージである。  
 ②空欄は、用例が無いことを示す。  
 ③複数の声点が加點されている場合は、それぞれの点の欄に加算している。

声軽の重(平声次濁字)・上声重・上声軽・去声軽・去声重・入声軽・入声重を区別する九声体系であったことになる。<sup>注6</sup>

#### 4 『蒙求』平安中期点の調類の名称

ここで、『蒙求』平安中期点の声調体系が、右の『悉曇藏』の九声体系にきわめて近いものであることに気づかれる。惟正・智聰の伝えた九声体系を参考にして、『蒙求』平安中期点の調類の名称を記せば、図三のように整理できる。



#### 5 『悉曇藏』の九声体系との相違点

『蒙求』平安中期点の声調体系と『悉曇藏』が伝える九声体系との相違点は、次の二点である。

- a 『蒙求』平安中期点では、去声に軽重を区別しない。
  - b 『蒙求』平安中期点では、「平声軽の重」と「平声重」とが、次濁字・全濁字で整然とした相補分布を示していない。
- 右の相違点は、『悉曇藏』が当時伝来の声調の実現されるべき理想の姿を記述しているのに対して、『蒙求』平安中期点が実際の読誦音を記したものであるという資料の性格の差に原因を求めることができようかと思う。

名称の第一段階では平声軽に含まれる「平声軽の重」は、加点点位置を平声重(B)の内側(A)の位置に定められている。

他の加点点位置としては、Cの右側およびB・Cの左側などが考えられようが、いずれも、漢字に重なるか離れることとなり、符号としてわかりにくいため避けられたのではなからうか。なお、平声軽の軽重を区別する加点点資料として報告されている仁和寺藏『仏母大孔雀明王經』九〇〇年頃点でも、平声次濁字への声点は、Aの位置に加点点されている。<sup>注9</sup>

#### 7 『蒙求』平安中期点の八声体系の調値

本資料の声調は、『悉曇藏』の教える九声体系と類似した八声体系であると考えられた。ここで、この八声体系の実際の調値について推測してみたい。

金田一春彦は、現在の国語諸方言の字音語アクセント、古代文献に記載されたアクセント、古代文献に記述されたアクセントに関する記事などを広く調査考察し、四声の調値を次のようにまとめた。<sup>注10</sup>

##### 〔結論第六〕

- 平聲 || 嚴密には平聲重……………低平調。
- 上聲 || 嚴密には上聲軽……………高平調。
- 去聲 || 嚴密には去聲重……………上昇調。
- 入聲 || 嚴密には入聲重……………低平調の入破音節。

##### 〔結論第七〕

軽……………同じ種類の音調のうち、より高く初まる音調の称。  
重……………同じ種類の音調のうち、より低く初まる音調の称。<sup>注11</sup>  
これによって、古来の声点図に見られる、四声にそれぞれ軽重を

左に、a b二点について、説明を加える。

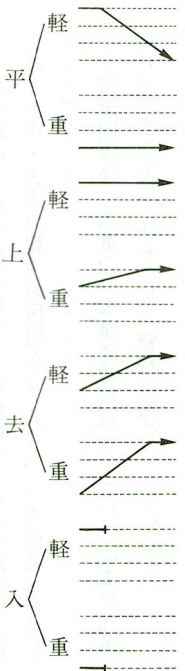
a 前掲『悉曇藏』の惟正の去声の軽重についての記述は、「重長軽短」という長さの相違だけであり、智聰の声調の箇所では、「去之軽重似自上重」と、去声軽・去声重・上声重の区別が困難であることを説いている。同様の記事は、後に引く『作文大体』にも見られ、『蒙求』読誦音として伝わった九声体系における去声の軽重も、伝来当初から区別し難かったものと思われる。よって、実際の読誦音を注したと思われる『蒙求』平安中期点で去声の軽重を区別していないのは、むしろ自然のようにさえ思われる。<sup>注7</sup>

b 『蒙求』平安中期点の実際の加点点において、きれいな相補分布を示さないものに、他に入声軽と重がある。入声軽と重とは、周知の通り、六声体系にも存在するが、六声体系の諸資料でもこの二声調間の混同例は、少なくないのである。<sup>注8</sup>この事実は、高い入破音と低い入破音との区別が困難であったことを示している。この点は、八声体系においても変わらなかったであろう。

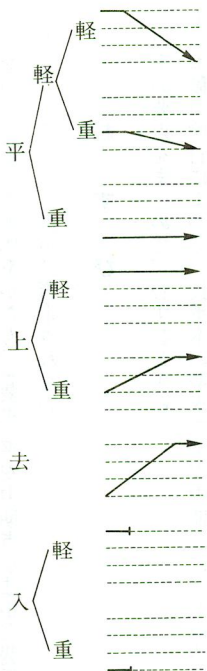
同様に、「平声軽の重」と「平声重」との出入りも、お互いの調値がよく似ていたためであると考えられないだろうか。六声体系における平声重は、『廣韻』の平声全濁・次濁字に対応している。また、現在の中国で、平声に陰陽を分ける方言でも、陰||清・次清、陽||濁・次濁という対応になっている。<sup>注9</sup>『蒙求』平安中期点の実態は、平安中期にすでに、平声軽の重(平声次濁音)の声調と平声重(平声全濁音)の声調との区別が困難な場合が多かったことを示しているものと思われる。

#### 6 「平声軽の重」の加点点位置

区別する八声体系の調値を示せば左のごとくにならざるを得ない。<sup>注12</sup>四段階の高低アクセントを想定しなければ、上声・去声の軽重の区別は不可能なのである。



このような四段階のアクセント体系の存在は、馬淵和夫が『道範記』(二四一年)の「八声図」の解釈の中で指摘している。<sup>注13</sup>この四段階のアクセントによって、「平声軽の軽」と「平声軽の重」との調値の相違点を推測して、『蒙求』平安中期点の八声体系の調値を示せば、左の如きものとなる。



「平声軽の軽」には清・次清字が、「平声軽の重」には次濁字が多く加点点されていた。清・次清字は無声子音ではじまり、次濁字は有声子音ではじまる。有声子音ではじまる音節は始まりが低く発音されるという一般音学的な理由によって、右の如くに推測する。また、実際の加点点例は、A「平声軽の重」とB「平声重」との間で混



同例が多いことから、「平声軽の重」の下降調は緩やかなものであったと考えた。

#### 四、日本漢音声調史上における「蒙求」 平安中期点の声調体系

1 六声よりも多くの声調を区別することを示す同時期の資料『蒙求』平安中期点の加点到比較的近い時期において、六声よりも多くの声調の区別を示す資料が指摘されている。管見の範囲では、左記のものである。

- ① 『悉曇藏』(八八〇年成立)<sup>注14</sup>
  - ② 『和名類聚抄』(承平年間八九三二〜九三八年)成立<sup>注15</sup>
  - ③ 『漢書楊雄伝』天曆二年(九四八)点<sup>注16</sup>
  - (長承本「蒙求」平安中期点(天曆頃))<sup>注17</sup>
  - ④ 醍醐寺本「妙法蓮華経釈文」(一〇〇四年頃書写移点)<sup>注18</sup>
  - ⑤ 『作文大体』(観智院本系統は、平安中期成立)<sup>注19</sup>
  - ⑥ 『史記』孝文本紀延久五年(一〇七三)点の師説<sup>注21</sup>
- これまで、右のような資料の記事は報告されていたが、実際に上声・去声に軽重を区別して加点されたものとしては、醍醐寺本「妙法蓮華経釈文」の掲出字の声点が指摘されていたのみであった。『蒙求』平安中期点は、実際の加点に基づいて、当時の漢音声調の一面態を知ることができる資料として、これらに加えられるべきものである。

#### 2 『蒙求』平安中期点の系統

『蒙求』平安中期点の訓点の系統は、法相宗関係であると推測さ

に用意している「蒙求」十本分類表<sup>注20</sup>で公表の予定である。

A点 [平声次濁字] 髻4連11顔13備20毛21門22陽25論29聞30元32など。[平声全濁字] 衡3尋5横5黄8殊8随9馮12縫12環14銅26など。[平声全濁字] 鈞26肱119水124踏129煖129以上。[平声次濁字] 湯48坑68鋒127以上。[去声全濁字] 置11驥73以上。[上声次濁字] 朗142以上。[去声次濁字] 傲106以上。

B点 [平声全濁字] 田5河5衝6桓6程7胡8岐9臺11符12重12など。[平声次濁字] 狼4袁8苗17寧17枚19干22雷27梁33輪33雄33など。[平声全濁字] 標5飛33巾77干80申87巴92水93鈞97普12鎮125など。[平声次濁字] 崔32推79以上。[上声全濁字] 倚8匕122以上。[上声全濁字] 柱101以上。[去声全濁字] 稚130以上。[去声次濁字] 王26以上。

C点 [平声全濁字] 東2公2忠2高4標5多6三7穢10技12江15など。[平声次濁字] 匡3超4傾7青14豊16充19郷24初25膠27天29など。[平声全濁字] 曹22蹊42強45留46差51華53斎57泰59程63平86など。[平声次濁字] 蒙75寧79虞84倪85以上。[去声全濁字] 照1146144少39灌142以上。[上声全濁字] 瞻54鬚93以上。[上声全濁字] 辨118以上。D点 [上声全濁字] 靖11士13梯15范23氏26断34后34社52道70限144など。[去声全濁字] 導2座45以上。[上声次濁字] 友15以上。

E点 [上声全濁字] 感5止6不6補8廣8子9拳16許19渚28影31など。[上声次濁字] 李5呂7米15礼16引18女22野25阮28魯31領32など。[上声次濁字] 孔7處7齒10捧15楚18撫21草29去31楷32巧48など。[上声全濁字] 簿4慮4土6志8后10下13辨20杜37家63断103など。[平声全濁字] 瞻28勾107昆119以上。[平声次濁字] 初5滙125清144以上。[平声次濁字] 迎41鼓115閏138以上。[去声次濁字] 刺16泛69曠91以上。[平声全濁字] 重61程63以上。[去声次濁字] 忤53利124以上。[去声全濁字] 販142以上。[去声全濁字] 垂33以上。

F点 [去声全濁字] 仲6記14制16季25宋31縦41四47寄51志55智56など。[去声次濁字] 望5類8二11路15義15詣19衛21魏23孟29彦32など。[去声全濁字] 害7治8定16自19賀20座21謝24授36盜42鳳44など。

注22 以上を要点をまとめて、むすびとする。

1 本稿の検討によつて、長承本『蒙求』平安中期点に、九声体系の流れを承ける八声体系が確認された(辞書・音義の類ではなく、実際に読誦されたことが確かな『蒙求』に、この声調体系が見られたことは重要である)。

2 これによつて、九声体系は、記録の上だけではなく、現実に日本漢音の声調史上に一つの位置を占めていたことが判明した。

3 九声体系は、「平声軽の重」と「平声重」とが「平声重」に統合され、上声・去声の軽重の区別がなくなり、六声体系へ合流したらしい。

平安後期以降、大量の日本漢音資料が存するが、いまだ九声(あるいは八声・七声)体系の加点資料は報告されていない。

#### む す び

注1 築島裕「長承本蒙求字音点(一)」、同「長承本『蒙求』の「研究」、沼本克明『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究」、参照。

注2 紙幅の許す範囲で例を加える(数字は所在行数)。その全容は、別

注1 「去声次濁字」抗4識6太20臭32破34効44曠67勸72統73聘80など。[上声全濁字] 鮑14負15被26趙33市41杖51夏67巨68紹70造75など。[平声全濁字] 荊82争88恂117芟149以上。[平声全濁字] 杭4環83勳85嘗119以上。[上声次濁字] 乳3頰96愈148以上。[平声次濁字] 康49寬125以上。[平声次濁字] 疑24以上。[入声全濁字] 黜128以上。[入声次濁字] 毓146以上。

G点 [去声次濁字] 孟7廟33議38義80曼145以上。[去声全濁字] 降22病97事133備149以上。[上声全濁字] 戶3墮115以上。[去声全濁字] 建37以上。[去声次濁字] 袴145以上。

H点 [入声全濁字] 築11叔14德25率36筆36駁38結39虱45谷50卓51など。[入声次濁字] 腋12玉14律16月19日25密29烈32陸35逸39など。[入声次濁字] 闕8泣9出10關18紳20却21漆27屈30客31尺35など。[入声全濁字] 跋4習8積17粟23統35白66雪72澤78箱83擲99など。

I点 [入声全濁字] 伏5劇7敵7席12鶴13統17泊28絶30白33食33など。[入声全濁字] 博5給20伯30昂35吉63刮82謫82德92ト92借117など。[入声次濁字] 岳11日1329歴1690諾28埒60笠77履85躍136鸞139易142以上。

注3 長承三年の墨声点は、平安中期朱点を補う加点がされている(沼本克明注1引用書、九七七頁参照)。よつて加点例は少ないが、その加点例から、声調体系は日本漢音の主流といわれる六声体系であることが知られる。実際の加点は、朱点に加えられていない漢字に対して、あるいは、朱点とは異なる声調を示す際、また、この場合のように次濁字に対して声点を一つ加えて、平安中期点とあわせて濁声点とする場合に行なわれる。

長承点の六声体系の平声重の位置は、図一のBの位置である。これは、長承点を二つ並べて記された濁声点の右側の点がBの位置から始まること(疑24「眉143」)、単点の場合はBに加点されていること(候126「錢126」)から明らかである。

注4 上声全濁字の半数程度にF点(去声点)が加点されていることに

ついで、沼本克明注1引用書第二部第五章、参照。

注5 怒声Ⅱ次濁音の解釈は、有坂秀世「悉曇藏所傳の四聲について」(増補新版 国語音韻史の研究)所収、遠藤光暁「悉曇藏」の中国語聲調(漢語史の諸問題)八京都大学人文科学研究所編、一九八八年V所収)による。

注6 なぜ平声にのみ細かな区別がされたのかは判然としない。しかし、平声所属字数は、上・去両声所属字の総数にほぼ匹敵するのであり、運用上、より細かな区別が必要だったからではないかと考えている。その際、平声軽にのみさらに軽重が分けられたのも、九声体系では、平声軽に平声全清字・次濁字という、平声の多くの字が分属されるからではなからうか。

なお、平声が必要に迫られての声調の細分化に対応できたのは、平声の発音時間が他の声調のそれと比べて長かった(周法高「説平仄」△歴史語言研究所集刊第十三本、一九四八年V参照)ためであらう(小西甚一「文鏡秘府論考 研究篇上」五五四頁。沼本克明注1引用書、一〇二七頁にも同主旨が述べられている)。

注7 長承本『蒙求』平安中期点に反映されている声調体系が、いつ頃わが国に伝えられたのかは、『蒙求』(七四六年頃成立)の伝来時期とも関連する重要な問題であり、現在のところ未詳とするほかない。しかし、元慶二年(八七八)八月二十五日に貞保親王が橘広相の侍読によって『蒙求』を読んだ記録があり(三代実録)、それ以前に請来されていたことは確実である。また、仮名音注の実態などから、9世紀はじめの伝来であるという推測もされている(沼本克明「日本漢字音の歴史」一三八頁)。とにかく、『蒙求』平安中期点の声調体系は、『悉曇藏』の九声体系とよく似てはいるものの、直接の拠り所とした音はそれよりも早い時期のものということになる。

注8 日本漢音資料の声調を『廣韻』声調・声母清濁と対比した場合、少なからず大勢にはずれる例が見られる(柏谷嘉弘「圖書寮本文鏡秘府論の字音声点」△国語学』第六十一輯V、沼本克明注1引用書)。  
る加点は、六声体系であると報告されている(沼本同上書、一〇四七頁)。

注17 表紙紙背記事「上声字重短軽長 去声字重長軽短」。また、掲出字声点の分析の結果、小松英雄は、「この加点は、上声の軽重の識別、次清音・喉音・正歯II等などの特立を、いずれも、optionalにおこなっていることがあきらかになった。」(日本声調史論考四九九頁)とし、沼本克明は、「本資料の祖点は八声体系で加点されていた(略)これが移点の際に乱れて上・去両声の軽重の区別を失ったのが本資料の加点の実態である。」(注1引用書、一〇〇七頁)としている。

注18 馬淵和夫「醍醐寺三宝院藏『法華経釈文』の字音について」(国語と国文学』第四十九巻五号)による。  
注19 「上声之重涉於去声、之輕於上声通難分別」(觀智院本)。小西甚一注6引用書などに指摘。声調の注記の背景には、四声それぞれに軽重を区別する八声体系があったものと思われる。  
注20 小沢正夫「作文大体の基礎的研究」(愛知県立女子大学 説林』第十一号)による。

注21 「集注本殊芳上聲輕讀之因之依此説」。小林芳規「平安鎌倉時代に於ける漢籍訓讀の國語史的研究」に指摘されている。  
注22 築島裕「長承本『蒙求』の「研究」。  
注23 ただし、醍醐寺本「法華経釈文」は、上声全濁字の去声化が見られず、匣母・曉母に特別な符号を使用するなど、辞書という性格上当該字の中国原音のあるべき姿を正確に示そうとしたものであり、その点が『蒙求』平安中期点と異なる。

注24 現時点では、『蒙求』平安中期点と同様の声調体系を有する加点資料は発見されていない。しかし、これは、伝存の平安中期の漢音声点加点資料がきわめて少ないことによるものと思う。  
小林芳規先生からは、山口市龍藏寺藏「蘇悉地羯羅供養法」平安中期点にその可能性があることをお教え頂き、沼本克明先生からは、陀羅尼の加点資料に見いだせるのではないかとのご教示を頂いた。

第二部第五章、参照)。これがどのような理由によるものかは、日本漢音の母胎音の声調の問題と絡んで、今後の課題として残されている。

注9 沼本克明「仁和寺藏重文孔雀経字音点——漢音声調史料としての位置づけ」△訓点語と訓点資料』第五十五輯V参照。また、次節で推測するように、A「平声軽の重」の調値がB「平声重」の調値とよく似ていたことも「平声軽の重」の加点位置としてAが選ばれた理由と考えることも可能ではなからうか。

注10 「日本四聲古義」(国語アセスメント論叢)所収。昭和二十六年、法政大学出版局)。その後、頼惟勤漢音の声明とその声調」(言語研究』第一七・一八合刊号、一九五一年)によって、この推定は確実なものとなった。

注11 小西甚一注6引用書、四九〇頁以下参照。

注12 小松英雄「日本声調史論考」六四六頁注②、参照。

注13 「日本韻学史の研究I」△昭和三十七年、日本學術振興会V五六八・五六九頁。また、沼本克明も「仏母大孔雀明王經」九〇〇年頃点の声調体系の解釈上有効であることを述べている(注9引用論文)。ただし、沼本の平上去入すべてに四種の声調を区別する十六声体系が存在したという説に対しては疑問がある(これに対する疑義は、つとに、森博達・木田章義「書評」沼本克明氏著『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』△均社論叢』十三、一九八三年Vで提出されている)。

注14 有坂秀世注5引用論文などに指摘。

注15 朝山信彌「古代漢音における四聲の軽重について」(国語国文』第十一巻十一号)などに指摘。現存の写本には、四声のそれぞれに、軽あるいは重の注記が存する。その声調注記の背景には、四声それぞれに軽重を区別する八声体系があったものと思われる。

注16 「撥(揆)」の注に「切菱癸反上聲重」(一一八行目)とある例が指摘されている(沼本注1引用書、一〇三三頁)。ただし、声点による

新資料の発見に期待したい。

【付記】

本稿は、一九九一年十月十八日の第六十五回訓点語学会での口頭発表をもとにまとめたものである。席上、築島裕・小林芳規・柏谷嘉弘・沼本克明・湯沢賢幸・近藤泰弘の各先生方には、貴重なご意見とご教示とを賜った。また、投稿後、編集委員会から重要なお示教を戴いた。銘記して、学恩に深謝申し上げる次第である。

——比治山女子短期大学講師——  
(平成三年十一月二十九日 受理)  
(平成四年二月十六日 改稿受理)